

所属	リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 修士課程	修了年度	平成 28 年度
氏名	村田 祥子	指導教員 (主査)	小林 修二

論文題目	回復期リハビリテーション病棟における退院先の判別要因と自宅復帰因子についての研究 —同居家族のいる脳卒中患者に着目して—
------	-----------------------------------------------------------------

本文概要

背景：我が国は、2015年10月1日時点で高齢化率が26.7%と超高齢社会を迎えている。65歳以上の要支援または要介護者がいる世帯のうち、介護者も65歳以上である老老介護世帯は51.2%存在している。そして、介護が必要となった原因疾患としては、第1位に脳卒中が挙げられ、介護度も高いことから、脳卒中患者の主介護者に多大な介護負担が生じていると考えられる。

目的：本研究では、同居家族のいる回復期リハビリテーション病棟(以下回復期リハ病棟)に入院中の脳卒中患者が自宅退院できるか否かの判別要因を明らかにしたうえで、適切な支援内容を検討することを目的とした。

意義：同居家族のいる脳卒中患者が自宅退院するために必要な患者側・家族側それぞれの要因を把握することで、回復期リハ病棟に入院中に実施できる効果的な支援内容を明らかにすることである。

方法：回復期リハ病棟に入院中の同居家族のいる脳卒中患者50例とその家族(以下主介護者)を対象とした。患者には、入院時と退院時の機能的自立度評価表(Functional Independence Measure 以下 FIM)を含めた身体機能評価を調査した。主介護者には、退院前1週間以内に Medical Outcome Study 12-item short form health survey version 2, 家族システム評価尺度, Zarit 介護負担尺度日本語版の短縮版の自記式アンケートを実施し、その他家族要因を調査した。患者の退院先を自宅と自宅以外との2群に分類し、各変数を退院先の2群間で比較した。入院時の各変数と退院先で有意差が認められた変数を基にロジスティック回帰分析を実施後、受信者動作特性曲線からカットオフ値を算出した。

結果：対象者50例の患者の属性は、男性25例、女性25例、平均年齢72.8歳±13.1歳、発症日または手術日から回復期リハ病棟への転院までの日数の中央値は32日であった。退院先を判別する要因は、入院時の FIM 合計得点のみが選択された。推定されたモデル式の判別率的中率は92%、カットオフ値は45点であった。入院時の FIM 合計得点が45点未満の場合は、食事と整容は監視以上、簡単な課題の理解と危険行為・問題行動がないことが自宅復帰因子となった。

考察：回復期リハ病棟に入院する時点での FIM 合計得点で退院先を予測した支援が可能であることが示された。自宅退院が困難と判別される患者に対しては、危険行為・問題行動がないことで目を離すことが可能となり、介護時間の短縮と介護負担感軽減に繋がる可能性が示された。

結語：回復期リハ病棟における同居家族がいる70歳代の脳卒中患者は、発症後約1か月での入院時の FIM 合計得点が45点以上であれば、自宅退院が可能であり、45点未満の場合は、退院時までに FIM 合計得点を58点まで獲得する、または、食事と整容は監視以上の能力を獲得し、目を離せる時間が確保されることが自宅退院に繋がる可能性が示唆された。

本研究の限界：本研究では、患者側の身体要因はある程度明らかになったが、家族要因は特定できなかった。そのため、家族に対しての詳細な支援内容の検討が十分に行うことができなかった。従って、今後は他の指標を加えてより包括的な検討を行うことが必要と考える。調査項目としては、退院先の決定時期や家族の来院頻度、家族の疲労の程度や原因、家族指導の内容・期間・回数についても検証していきたいと考える。